

味村考祐（大谷大学）

H.-G.ガダマーが『真理と方法』（1960）のなかでアリストテレス倫理学、とりわけ道德知の在り方に依拠しながら説明する適用概念はテキスト解釈といかにかかわるのか。本発表ではガダマーの見解に沿ってこの概念を確認した上で、この問題を考察する。

ガダマーが近代解釈学の出発点に置くシュライアマッハーはテキストと解釈者の間にある歴史的隔たりに着目することによって、著者の個性ないしその心的過程を客観的に認識することを課題とする一般解釈学を築く。他者の心的過程を理解するためには初めから解釈が必要だというのである。この解釈学の特徴は理解（認識）のための技法という点にある。シュライアマッハー以前の解釈学で重視されていた理解、解釈、適用の三つの契機のうち、この理解（認識）のための技法においては適用が除外される。というのも一般解釈学にあって理解とは解釈そのものであり、そこに解釈者自身への適用は不要だからである。しかしガダマーによれば、解釈者との間に歴史的隔たりをもつテキストは解釈者の現在の状況のうちに媒介される必要がある。そして彼はここに適用の契機を再度見出す。

適用概念の意味について、ガダマーはアリストテレスが熟慮（フロネーシス）と呼ぶ道德知に依拠してこれを説明する。私たちはこの道德知の特徴を一般的なものの知と個別的事例との相互関係に見ることができる。たとえば一般的なものである法は個別の事例に形式的に適用されるものではなく、個別の事例に適用されてはじめてその法の意味が満たされるものであるという点で相互依存的である。

さらにガダマーは他者に対する理解の良さである理解力（シュネシス）という別ヴァージョンの道德知によってテキスト解釈とのつながりを示唆する。この理解の良さは互いにもっているある共通性を前提にする。たとえば助言は友情関係で結ばれていることを前提にする。というのも助言を求める者と同じように正しさを望む者によって考えられた助言しか、その者にとって意味をもたないからである。

ガダマーによれば、過去のテキストを理解することは、他者の語る事柄を理解することである。それゆえテキスト解釈ではこの理解力が参考になるように思われる。しかしここで適用概念の意味が問われる。というのも理解力が前提にする共通性は、テキスト解釈においては伝承への帰属性として認められるものであるが、これらを同様に考えることは難しい。なぜなら理解力の共通性は二人の人間の間にあるが、他方で帰属性は解釈者自身の理解の可能性を表すものだからである。この相違点に対してガダマーの立場からはいかに説明するのだろうか。